

起死回生の妙手

わが国の農業が全体として激しい地盤沈下を続けている中で、もっとも強いしわ寄せを受けているのが畑作であろう。そのことは、作付面積において端的に表われている。

昭和35年から45年への農作物の作付延面積の減少は約190万haであるが、畑作物の減少は約180万haであり、作付減少の95%は畑作によっている。

遅れているところを盛り立てる時に、“振興”という言葉が使われる。「畑作振興」の必要性が唱えられたのは、昭和30年ごろからであるが、今日でも叫び続けられている。

畑作部門の試験研究の全国的調整の仕事の一部を、私が分担してから数年になるが、最近はいかに振興するかというよりは、いかにして減びるのを防ぐかに追い込まれている。畑作振興のその旗の色は褪せ、その声は空しく、こたますら返って来ない感じがする。例えば、育種組織の中で重要な役割をもつ指定試験地のうちで、ここ1～2年に東北と南九州のナタネ、北関東の麦、九州の大豆など作付の減った畑作物は、委託した県から次々と返上され廃止となった。それを国の試験機関にとり込むことも容易には進まず、あたかも戦国の世に身方の城が1つ1つ落ちて行くのを見ている思いである。

日夜苦悩している今の結論は迂遠のようだが、畑作農業いや日本農業を守る道は、化石燃料に毒されている人々の価値観を変革して、太陽エネルギーを活用している農業の役割を再認識させることにあると考える。その時期は、最近の大豆の問題が示すように意外に早いのではないだろうか。そして、試験研究の立場での起死回

目 次

昭和47年度春夏作芝関係除草剤・

生育調節剤試験成績概要

I 除 草 剤

1. A-820乳剤	3
2. BaS-3510水和剤	4
3. B-3356乳剤	5
4. Lenacil水和剤	5
5. NIP水和剤	6
6. Po-SAN液剤	6
7. SSH-36液剤	7
8. TREX-SAN液剤	8

II 生育調節剤

1. Po-SAN液剤	9
2. RH-531水溶剤	10

III おわりに

(財)日本植物調節剤研究協会

昭和47年度畑作関係除草剤

試験成績概要

<第1表>畑作用除草剤試験の推移	11
<第2表>作用性試験供試薬剤	
成分一覧表	12
<第3表>適用性試験供試薬剤	
成分一覧表	13
<第4表>実用化判定表	16
<第5表>実用化薬剤使用基準	17
(財)日本植物調節剤研究協会	

生の妙手は、最近の研究成果として3割増収のハッカ新品種が育成されたことや甘味資源として有望な新作物導入の可能性が報告されたが、やはり新技術の開発以外にはないと考える。

(農林省農事試験場畑作部長 松実成忠)